

車椅子バスケットボールにおける

リハビリテーション志向から競技志向への転換

木 村 汐 里

キーワード：車椅子バスケットボール，身体障害者スポーツ，リハビリテーション，競技

1. 研究の動機

車椅子バスケットボールは脊髄損傷者のリハビリテーションスポーツとして考案され行われていたが、現在では「障害者スポーツの花形」と称されるほど競技性の高いスポーツへと発展している。筆者自身、初めて車椅子バスケットボールを目にした際、一般のバスケットボールに劣らない巧みな技術と激しいプレイに目を奪われた。また、アメリカンフットボール部でトレーナーをしていた経験から、リハビリテーションに興味を持った。そこで、リハビリテーションスポーツであった車椅子バスケットボールがどのように障害者スポーツの頂点とも言えるほどの競技スポーツへと発展したのかを明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的及び意義

日本においてリハビリテーションスポーツとして導入された車椅子バスケットボールが、障害者スポーツの中で最も競技性の高いスポーツへと発展した経緯や要因を解明することで、車椅子バスケットボールが日本の障害者スポーツの発展をリードすることとなった要因を明らかにすることが本研究の目的である。

また、この研究を通して今日の障害者スポーツの現状や問題点を明らかにし、今後の障害者スポーツの発展に寄与することが本研究の意義である。

3. 先行研究の検討

日本における車椅子バスケットボールは、1960年に中村裕医師によって紹介され、1964年のパラリンピック東京大会が契機となり、参加した選手たちによって精力的に普及活動がな

され発展したという、単線的な歴史でしか述べられていない。また広く身体障害者スポーツに関して見ると、1990年代にリハビリテーションスポーツから競技スポーツへと意味付けが変化したと言及されているが、車椅子バスケットボールにおけるその意味付けの変化についての詳細は明らかになっていない。

4. 研究の課題と方法

日本に車椅子バスケットボールが導入されることとなった背景、リハビリテーションスポーツとして普及した経緯、また、競技スポーツとして発展した要因を明らかにすることを本研究の課題とする。方法は、主に社会的背景に着目し、リハビリテーションスポーツとしての側面と競技スポーツとしての側面の両方を検討していく。

5. 本論

5.1. 日本における車椅子バスケットボール導入の背景

車椅子バスケットボールは第2次世界大戦後にアメリカやイギリスで誕生し、その流れが世界中に広まった。アメリカでは、車椅子生活となった復員軍人たちが若いエネルギーをぶつけるためのスポーツとして始め、数年のうちに圧倒的な人気となった。1949年にはアメリカ車椅子バスケットボール協会が設立され、組織化が行われた。イギリスでは、1944年にルートヴィヒ・グットマンが国立ストークマンデビル病院で脊髄損傷者の治療及びリハビリテーションの一環として取り入れ、驚異的な成績を収めた。その後同病院で車椅子スポーツの競技会が行われ、外国からも選手が参加するようになると、

パラリンピックの前身である「国際ストークマンデビル大会」として発展した。

一方当時の日本における身体障害者スポーツは、地方公共団体によって開催されたスポーツ大会はあったものの、必ずしも競技としてのルールを定めたものではなく、組織化には至っていなかった。障害者のスポーツは個別の施設や療養所、学校などでレクリエーションや娯楽の一部として行われているにすぎなかった。

このように、アメリカやイギリスで誕生した車椅子バスケットボールが世界各地へ広がっていったこと、また、日本において障害者スポーツの発展が遅れていたことが、日本へ車椅子バスケットボールを導入する背景となった。

5.2. リハビリテーションスポーツとしての普及

日本における車椅子バスケットボールは、1960 年大分県の国立別府病院の中村裕医師によって紹介された。中村はストークマンデビル病院を視察し、グットマンの功績に衝撃を受け、日本においても障害者のリハビリテーションにスポーツを取り入れるべきだと主張した。医師や関係者からは障害者にスポーツをさせるのは危険だと批判を受けたが、1961 年の大分県身体障害者体育大会などでデモンストレーションとして車椅子バスケットボールの試合を行い、全国の注目を集めた。

そして、中村をはじめとする医師や行政の尽力によって、1964 年にパラリンピック東京大会が開催された。車椅子バスケットボールには施設にいた障害者たちがチームを組み出場したが、大会の目的は障害者の機能回復や社会復帰にあり、素人チームの競技レベルは低かった。しかし、競技に出場した障害者たちは、日本人選手のほとんどが病院や施設の入院患者で職に就いていないのに対し、外国人選手の多くは職に就いており、それぞれ自立した生活を送っていることを知り驚いた。そのことが後の身体障害者スポーツへの熱が高まる要因となった。

5.3. 競技スポーツとしての発展

パラリンピックを契機に車椅子バスケットボ

ールは全国へ普及し、1967 年から次々とクラブチームが誕生した。これらが互いに交流を行い、1970 年には初の全国大会が行われた。また、「全国身体障害者スポーツ大会」でも 1972 年から初の団体競技として取り入れられた。しかし、参加できるチームが少ない全国身体障害者スポーツ大会に不満がつのり、1974 年にはクラブチーム対抗の大会を開催しようとの意向が高まり、「1974 年全国車椅子バスケットボール競技大会」が開かれた。この大会の開催は、障害者自身が車椅子バスケットボールを、リハビリテーションではなく自ら楽しんで積極的に行う競技スポーツとして捉えようとしていたことが要因であり、これを契機に車椅子バスケットボールの競技化が行われた。

そして、1975 年には日本車椅子バスケットボール連盟が結成され本格的に組織化が進み、国際大会への参加や技術の向上によって競技化がますます加速し、病院や施設でリハビリテーションとして行われる一方で、競技スポーツとしての側面が大きくなっていった。

6. 結論

車椅子バスケットボールは、身体障害者の機能回復や社会復帰を目的にリハビリテーションスポーツとして医師や行政が率先して取り入れ、現在もリハビリテーション志向を色濃く残している。しかし、パラリンピック東京大会で外国人選手の自立した生活を目の当たりにしたことによって身体障害者スポーツへの熱が高まり、次第に障害者自身がスポーツを競技として楽しむようになった。そして、連盟の結成などによって組織化が進み、競技志向が高まった。すなわちリハビリテーションスポーツという土台の上で競技スポーツとしての発展が折り重なっているような重層的な歴史像が捉えられる。また、他の障害者スポーツに先立って 1970 年代に競技化が行われたことは、車椅子バスケットボールが「障害者スポーツの花形」と称されるほど競技性の高いスポーツへと発展した要因の一つであると考えられる。（指導教員 秋元忍）